

高齢者の移住案には、反対ではない。ただ、尊重しなければならないのは高齢者それぞれの意思。ユーザー（移住希望者）の視点が必要だ。移住した人が、移住先でその人らしい人生のストーリーを描けるかどうかが大切。移住先は地方に限らず、都市、近郊、県内など多様な移住タイプがあつていい。地方移住は選択肢の一つ。

私は以前から、中高年が元気なうちに移住し、移住先で仕事や生涯学習にも取り組める共同体「CCRRC」の必要性を提唱してきた。

元気なうちから地方に移り住めば、消費がアップし、雇用が生まれ、税収も上がる。生きがいを見いだした住民が健康になる。医療費も減少する。キャリ

# 三菱総研プラチナ社会 研究センター主席研究員 松田 智生 氏



でもうける仕組み。介護保険に依存した収益モデルから、健康产业で収益を得るシステムを実現すること。これを実現するためには、国は、規制緩和や税制優遇策を積極的に進めるべきだ。例えば、健康な人の健康保険料の減額、要介護度が改善した場合の事業者への成功報酬、住み替えを促進する住宅の売却税・取得税の減税などが考えられる。

移住者輝けるかが鍵

アを積んだ移住者は、地域の若者に知識や技術を伝授できる。民公産学の「四方両得」だ。CCRは「アクトエイブンニアを核にした多世代が輝く街」と言い換えてもいい。

アを積んだ移住者は、地域の若者に知識や技術を伝授できる。民公産学の「四方一両得」だ。CCRCCは、「アクトエイブンシニアを核にした多世代が輝く街」と言い換えてもいい。

◆ ◆ ◆

CCRCCは、全米に約2千カ所あり、70万人が居住している。

ペット委員会、財務委員会といった委員会に参加している。隣の大学の生涯学習講座にも通

日本版CCRCは、米国版をさらに進め、閉ざされた富裕層高齢者のコミュニティでなく、多世代が参加できる地域に開かれた「コミュニティー」を特徴にすべきだと思う。目指すのは、介護でもつけるのでなく、介護にさせないこと。

# 自慢できる地域づくりを

ントは、腹をくった事業主体が現れるかどうかだ。

地域のキーパーソン、新たなライフスタイルに関心を示すユーザーが中心となって、年賀状に自慢したくなるような移住主の情報を書きこめるような魅力的な地域づくりができるかどうか。例えば年賀状に「『弘前さくらビレッジ』に引っ越しました。好きな歴史を学びながらエンジニアとしての経験を生かして学生に対するアドバイザー

本の一の短命県脱却へ、CCRCは活路を開く方法の一つだ。移住者だけでなく、地元住民が自宅で生活しながら、CCRCで食事をしたり、健康プロクラムに参加することもできる。青森が「課題山積先進県」から、「課題解決先進県」になる道に向かって、CCRCは、青森再生の切り札になり得る。

CRCの可能性を探るフォーラムに講師として招かれたためだ。市中心部から近い浅虫は、温泉地であり、高齢者を引きつける要素はある。浅虫に限らず、青森県で、CRC実現の可能性はあると思う。青森のようないくつかの北国への移住に抵抗を感じる人もいるかもしれないが、まずは夏のお試し移住をしてもらうのも一つの手だ。

として活躍しています」と書けるような地域づくり。「『浅虫ヘルスケアビレッジ』に引っ越しました。温泉さんまで健康になって、海外観光客の招致アドバイザーとして頑張っています」とあいさつできるような魅力づくり。

CCRICは、目的でなく手段。CCRICを通して、住民がどんな地域をつくりたいか、自分の良い生き方、良い死に方を考えるきっかけになれば。

(聞き手・葉谷賢)  
【本記1面】

無断複製・転載を禁じます